

Title	奥井都市論における内生思考：奥井都市経営論の検討に向けて
Sub Title	
Author	吉原, 直樹(Yoshihara, Naoki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1998
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.3 (1998. ) ,p.28- 33
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集I I : 奥井復太郎生誕101年記念シンポジウム
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19980000-0028">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19980000-0028</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 奥井都市論における内生思考 奥井都市経営論の検討に向けて

吉原 直樹

### 1. はじめに

本稿では、奥井復太郎の内生思考のあり様をさぐることによって、彼の都市経営に関する議論の基底にあるものを浮き彫りにしてみたいと思う<sup>1)</sup>。もっとも奥井には、生涯にわたる膨大な著作活動にもかかわらず、都市経営という形で明示的に述べたものはほとんどない。少なくとも、都市経営についての体系的な展開を奥井にもとめることには無理があり、せいぜい地方産業、地方振興、地域経済開発等について部分的な叙述にとどまっていたというのが、実情である。奥井の都市論において都市経営がどのような位置を占めていたかについて知るには、さしあたり『現代大都市論』の序における以下の叙述が参考になる。

私の研究分野は都市、殊に現代大都市の経済・社会的解明であって、都市経営とか都市行政とかは直接には問題の埒外にある。私は都市現象の正しい理解の上に立ってこそ立派な都市の経営も政治も可能であると信じる……(著作集5)。

しかし晩年になって奥井は、たとえば北九州市マスタープランの答申において「経済の発展、産業の誘致が自己目的となることを否定する」、「市民の創意と自主性を生かす努力が必要である」(著作集7)と述べていること、さらに同答申の「生産する都市」の箇所では北九州市の「素材工業偏向を指摘し…二次加工部門を育成して都市内部の経済循環をはかるべきこと」(著作集別巻)を提案していることから明らかなように、一つの内生思考に裏うちされた都市経営にたいする認識を示すようになる。

ところで、奥井の内生思考は彼の都市経営に関する議論のキーノートをなしているだけでなく、その都市論をつらぬく学問的モチーフとともに、初期から晩期への都市論の展開の道筋を示唆しているという点でも、興味深い。ちなみに、ここでいう「内生的」とは内生的(endogenous)であり、自立的(self-reliant)ということである。そして内生思考とは、社会の内部から生みだされてくるもの、しかもその基盤を、いわば人間の生活様式や発展方法に関する自律性を前提とする自立性にもとめるような思想のことである。だからこそ、内生思考は「使用価値」(人間の基本的価値)、「分権(decentralization)」、「共生(the convivial)」というキーワードとともに、他者・他集団との交歓を通じる人間と社会の創造性を何よりも重視するのである(西川、1989)。

それでは、そうした内生思考とともにあった奥井都市論はいったいどのような性格を有しているのでしょうか。

## 2. 奥井都市論の性格

奥井都市論の性格を語る場合、いくつかの系でくることが有効である。まず一つは、奥井の思想形成、学問形成の足跡とともにトピックをなしたラスキン—中世都市—シカゴ学派を通底するものに着目して、そこから抽出される性格である。ちなみに、奥井は「都市研究への一回想」という論文のなかで次のように述べている。

中世都市は本当に素晴らしかった。廻らされた城壁と城門、その裡にぎっしり建て込まれた家屋、中央に聳える教会とその尖塔、ラート・ハウス、その前面にひろがるプラッツ等は、それらいちいちの建築についてでなく、コンパクトな集団生活の形体としてこれあるかなの感を十分に与えてくれた。ここにコミュニティがあるという啓示であった。この感得がラスキンの直接の影響であったのはいうまでもない。勿論それは私の内面的な関係においてである。教会の塔は何故に天に向かってかくも高いかという質問に対してラスキンは、それは人々の神に対する渴仰のゆえにと答える。生命と摂理、そして生けるものより高いものに対する精進とそのためへの闘争、そうした事から生れる形体における調和、そういうものとして自然美を謳うラスキンの観察解釈がそのまま、私の中世都市観になったとって差支えなかった。同時に今日なお、これが…私の総合観の基底になっていることもいなめぬことである（著作集7）。

『都市の精神』の序をしるした中沢誠一郎によれば、上述のコミュニティと総合観への開眼がシカゴ学派へのまなざしに通脈しているという（著作集別巻）。

奥井都市論のいまひとつの系は、生活論として読み込んだ場合に浮かび上がってくる性格である。こころみに山岸健は、奥井にあっては「人間の共同生活こそが、探究の主題」であり、「地域・景観・社会を一体的にとらえようと試み」た点にこそ最大の特徴があると述べている（「生活論としての都市論」著作集別巻）。また佐藤仁威は、奥井の晩期に焦点を据えて、奥井が「生活共同体」としての都市社会に意識的に目を向け、そこから「国民生活」への関心が拡がっていったことに注目している（「都市社会学研究と奥井復太郎博士の業績」著作集別巻）。他方、小松隆二は、「生活論・人間観を媒介に、都市学、社会思想論などと絡み合っている」「先進的な性格をもつ」社会政策論の文脈で奥井都市論にせまっている（「社会政策と奥井復太郎」著作集別巻）。三者三様ではあるが、生活論の系譜をひもといっている点では、いずれも共通の地平にあるといえる。

しかし何といても、奥井都市論の性格が最大集約的に立ちあらわれているのは『現代大都市論』であろう。ちなみに、藤田弘夫は、『現代大都市論』をつらぬく奥井都市論の

キーノートを以下の3点、すなわち(1)「外的に規定する条件」と「内的構成や特質」の総合的把握、(2)「中心機能の地域的結集」という概念、(3)生活確保の「社会」型としての町内集団の把握、において観取している<sup>2)</sup>(「孤高の研究としての奥井都市論」著作集別巻)。詳述はさておき、藤田のこうしたとらえ方は、奥井都市論の社会科学の定式化の試みとしては一つの範型をなすものといえよう。

なお、以上の文脈とは異なるが、国土計画論の位相で奥井都市論を検討することも重要であろう。特に国土計画論と時局論、あるいは社会政策論との間を<読む>ことによって奥井の戦時体制へのかかわりが明らかにされ、そのことを通して奥井都市論のさらに別の側面が浮き彫りにされよう。

### 3. 奥井都市論と内生思考

さて、以上の性格を踏まえた上であらためて注目されるのが、奥井都市論における内生思考のあり様である。奥井の内生思考の端緒的形態は、研究者としての起点を構成したラッセルおよびラスキンについての一連の考察においてすでに観られる。奥井は、「社会の健全なる発達も個人の成育も個人間の密接な結合に因り」、「個人の位置をあらゆる社会制度の上位に置きたる」(「ラッセル思想とウィリアム・ジェームス(1)」著作集1)ラッセルの見解の裡に近代の個性と人間個々の交わりの原型を見いだしている。また「生産者の労働は…重要な生活の必需品の生産に投ぜられること」、「奢侈の享樂はその為に需要せらるる労働者に彼等の必要とする生活資料を供給するに非ずして寧ろそれを彼等より奪ふものである」、「富は全人類により良き生命を確保せしめる為のもの」(「ジョン・ラスキンの奢侈論」著作集1)とするラスキンの奢侈論から、社会の発展が人間の基本的必要を充足すること(need-oriented)に向けられるべきことを、さらに「自發的眞卒なる精神と技能より發する生産者の生命の躍動發展」(「『近世画家論』第2巻より『建築の七燈』に至る迄(2・完)」著作集1)、「労働者は先ず自からを悟り、而してその上に思想を形成すること」、「労働者の正当なる状態は彼に制作者としての仕事と地位を與ふる事」(「ラスキンの労働者教育」著作集1)とするその労働者論を通して、労働者の内部から立ちあがってくる自律的で創造的な主体の生成状況を観てとっている。

内生思考の発見へとつながるこうした奥井のラッセル、ラスキンへのまなざしは、彼がJ・S・ミルの社会政策論に向けるまなざしとも通脈している。奥井はまずミルにたいして「獨逸自由貿易論者の如き自由放任、自由競争論者、非社会政策論者に認めらるると共に他方、歴史派倫理派又は社会改革論者の所説にも近からんとする根源が存する」として、「過渡期の思想家」という位置づけを与える。その上でミルが「現實の人は利己心のみによって導かれず、致富の欲求に伴はざる動機も有する」、「『人類の進歩』に従って『極度の利己心を緩和する』能力が個人に認められてくる」そして「個人の自由、責任の個人的帰属の形式に於いてのみ…人々は…共同の利害を会得するの向上を可能ならしむる」と

している点、すなわち「私利」人から「個性」人への置き換えを容認していること、さらに「人類理性の進歩発展は各個人に他のあらゆるものと相互合体の感情を生ぜしむる」、「国民は彼等の自由なる社会生活に於いて如何に彼等の行為と社会全體との間に関係があるかという事を如実に知得する」としている点、すなわち人間と社会との相関的な関係を強調していることに着目している（「ジョン・スチュアート・ミルと社会政策」著作集2）。奥井に拠るまでもなく、ミルの社会政策論は究極的には個人の成長＝社会の発展とみる自然法的近代市民社会観の枠内にある。が一方で、ミルが人間個々の相互依存関係と調和を説いている点に内生思考につながるものがある、と奥井はみているのである。

それでは、奥井都市論の集大成といわれる『現代大都市論』において、どのような形で内生思考が認められるのであろうか。「都市は、国民・世界経済社会を大きな社会としてその機構に基いて出来た、支配的中心的機能及び活動の所在である」とする『現代大都市論』での都市の定義は、都市の本質的（＝社会科学的）規定としてこれまでしばしば引例されてきた。しかしここで「中心機能の地域的結集」という都市概念が、一定の社会関係を確保するためには一定の地域的形態的条件が必要であるとする、奥井の社会学的命題から派生したものであることを確認しておく必要がある。というのも、『現代大都市論』のキーノートを構成している、都市を地域（土地）、人間、社会の三者関係においてとらえる論調—いわゆる「外から」の把握と「内から」の把握—は、こうした社会学的命題を抜きにしてはあり得ないからである。さて、そのような社会学的命題が一大水脈をなしている『現代大都市論』で内生思考を底在させているものといえば、「共同生活体としての都市社会」というとらえ方である。そこでは「生活充実」の方面において共通の関心が生じ、共同生活の実がはぐくまれることが指摘される。そしてこの「共同生活体」の地域的、社会的構成がいちじるしく複合的であることが強調されるのである。だがこうした「共同生活体」も、『現代大都市論』ではどちらかといえば従属的な位置づけしか得ていないように見える。

これにたいして「再論『現代大都市論』」（著作集7）では、「人間活動を最も機能的、合理的に展開せしめると同時に、人間（市民）生活の理念を表現し、さらにその向上を実現せしめ得る」都市的生活様式の確立とともに、それ自体、高度に内発的である「共同生活体としての都市社会」が意識的に追及されている。詳述はさておき、筆者はそこにみられるコミュニティとしての生活の場という考え方において、内生思考としての一つの立場を獲得しているとみる者である。

#### 4. むすびにかえて

以上、走り抜けに概観してきたところからも明らかのように、奥井都市論に観られるある種の内生思考は、彼の生活論を介して社会思想論、社会政策論、そして町内会論に深く足を下している。そしてその総合観に立脚する奥井都市学の性格を見定める上で、この内

生思考がいかなる位置を占めているかを検討することはきわめて重要であると考えられる。考えてみれば、戦後日本の都市社会学は、『現代大都市論』に与えられた「都市社会学事始」の書（大道安次郎）という位置づけにもかかわらず、自らの存在証明を皮肉にも奥井都市論を無視することによっておこなってきた。そうした点で、奥井都市論を「孤高の研究」とする藤田の指摘は、戦後日本の都市社会学のあり様を示してあまりある。しかし、いまなぜ奥井都市論なのかという問いにたいして、生誕100年の節目にあるという以外必ずしも説得的な答が出されているわけではない<sup>3)</sup>。内生思考をさぐる試みについては、さしあたり奥井都市論にたいする偏見をぬぐいさるところから出発して、上述の答を出すためのささやかなきっかけとなることが期待される。

なおついでに記すと、奥井の都市経営論は、彼の晩年の問題関心、特に社会とのかかわり方を考える上で要となる。ここでは当初、その内生思考を通して都市経営論にアプローチしようと考えたが、果たせなかった。冒頭でも述べたように、彼の都市経営論は体系的な形では展開されていない。しかし戦後になって発表された都市論、そして一連の国民生活論、教育論において、奥井の都市経営論につながる部分認識を知ることができる<sup>4)</sup>。これらの点については、執筆を予定している別稿で触れることにしたい。

## 注

- 1) 本稿は1997年7月12日に開催された三田社会学会大会シンポジウムでの報告用原稿を再録したものである。なお、以下の叙述では、奥井の著作からの引用は『奥井復太郎著作集』〔奥井(1996)〕に拠っている。ただし、引用に際しては、著作集1～8、別巻と略記した。
- 2) 『現代大都市論』を奥井復太郎の集大成としてとらえる場合、同時にそこから「社会的交流の結節機関」（鈴木栄太郎）、「統合機関」（矢崎武夫）、「町内会＝文化型」（近江哲男）等、その後の日本都市社会学の展開に重要な影響を与えた一連の概念が派生したことを指摘しておくことも重要であろう。
- 3) 奥井都市論の「現在性」については、ほぼ同時代を生きた磯村英一の都市社会学と比較することで興味深い論点が浮かび上がってこよう。その場合特に、両者の来歴および「社会」へのかかわり方の違いが無視できない。なお、磯村の都市社会学については、併せて吉原(1998)を参照のこと。
- 4) 奥井都市経営論の「現在性」について検討するにあたって一つのメルクマールとなるのは、いわゆる減量型都市経営論からどの程度距離を置いているかということである。またその点とのかかわりで、ラッセル、ラスキン、ミルに熱いまなざしを注いだ奥井が「都市社会主義」にどのような視線を向けたかが問われる。

管見するかぎり、奥井の自治体論は皆無に近いが、一瞥したような内生思考に裏うちされて、奥井が自治権の拡充につながる制度改革および合理的な政策選択に基づく行政の効率化、計画化にたいしてどのように考えていたか、さらにそもそも、奥井が都市経営の目標をどこに置いていたか、また生活環境の整備とか雇用の増大のような住民の広義の福祉水準のミニマムをどこに設定していたかを検討することが欠かせない。

## 文献

- 奥井復太郎 1996 『奥井復太郎著作集』第1～8巻、別巻、大空社  
西川 潤 1989 「内発的発展論の起源と今日的意義」鶴見和子・川田 侃編『内発的発展論』東京大学出

版会

吉原直樹 1998 「20世紀・東京・磯村都市社会学」『日本都市社会学会年報』16号

(よしはら なおき 東北大学文学部)